大阪府立茨木高等学校　学校運営協議会　令和元年度委員等

委員
　添田　晴雄（会長）
　岩井　八郎（副会長）
　柴田　　仁
　中村　　卓
　樫本　佳子
　田中　未知

校長及び事務局員
　岡﨑　守夫（校長）
　山脇　和美（教頭）
　門野　良彦（事務長）
　本管　克江（首席）
　森　登紀子（首席）
　森　　佳希（教務主任）
　籔　麻智子（進路指導主事）
　都　　浩司（生徒指導主事）

令和元年度　第１回学校運営協議会議事

日時：令和元年６月８日（土）14:00～16:00
場所：大阪府立茨木高等学校　校長室
出席者：【　委　　員　】添田晴雄、岩井八郎、柴田仁、中村卓、樫本佳子、田中未知

【校長・事務局】岡﨑守夫、山脇和美、門野良彦、本管克江、森登紀子、森佳希、
籔麻智子、都浩司

１．校長挨拶
２．委員紹介・事務局職員紹介
３．学校運営協議会の位置づけ
４．議事
　① 本年度の「学校経営計画」について

② 教科書選定について
③ 質疑応答
④ 次回運営協議会日程

＜校長挨拶＞
昨年度、小塚泰彦氏（株式会社 morph transcreation・高 49 回）のご協力を得て、茨高のブランディングを行った。
今年度の宿泊野外行事は、6 月 17 日からカンボジアへ行く。その事前学習として 4 月に、アンコール遺跡研究の第一人者である上智大学の石澤良昭先生に本校へお越しいただきご講演いただいた。一高校の宿泊行事の事前学習としては考えられないような企画である。生徒たちには、これからも「本物」に触れる機会を大切にしてもらいたいと考えている。
事務局からの「議事」に係る説明
①「学校経営計画」について
今年度の重点目標を中心に説明
１「高い志」の涵養を図る教育システムの再構築
（１）「グローバル」に視点を置いた取組み
ア Brothers&Sisters プログラム及び事前学習の充実、海外宿泊野外行事及び事後学習の充実
今年度はモンゴルからの留学生 1 名を 2 年生で受け入れている。
今年度 73 期生はまもなくカンボジアへの宿泊野外行事が控えている。74 期生の行き先は、生徒の投票により、ベトナムに決定した。今後は行事委員を中心に、準備していくことになる。
イ 英語教育の内容のさらなる充実
TOEFL iBT の 5 年間の取組みが昨年度で終了した。この取組みにより、英語に対する「体力」が培われた。また、昨年度から、1 年生全員に GTEC を受験させている。今年度も 9 月に実施する予定である。昨年度の結果を見ると、第 1 学年冬の段階で全員が CEFR の A2 以上であった。また、第 2 学年の英語の授業では、後期にディベートを取り入れている。本校では、今年度も引き続き、内容を深めるための事前準備を必要とするアカデミックディベートに取り組んでいく。

（２）「高い志」を涵養し持続させるための取組み
ア 卒業生との連携の強化による取組みの充実
学問への入り口としての「学問発見講座」、また大学等での学びの先にある職業についても視野を広げる「卒業生講座」等、本校卒業生と連携した多くの取組みを充実させていく。
スプリングセミナー（1 年 5 月）、オータムセミナー（2 年 10 月）、京都大学研究室訪問（7 月）、東京スタディツアー（8 月）等を紹介。

その他の高大連携事業等として

大阪大学医学部心臓血管外科早期医療体験プログラム、国際高等研究所（IIAS）ジュニアセミナー、海外セミナーツアー、グローバルサイエンスキャンパス（「京都大学ELCAS」、「大阪大学 SEEDS」、神戸大学を実施機関とする「ROOT」）、大阪教育大学「教師にまっすぐ」、京都大学サマースクール、京都大学キャンパスガイド、大阪大学ツアー、大阪大学ジャイアントインパクト等を紹介。

イ 課題研究の充実

課題研究は、本校では第２学年後期の取組みであるが、夏休み前に開講することで、夏休みの期間も有効活用できるようにしている。また、今年度も京都大学大学院より研究者を２名お招きし、生徒たちだけでなく、生徒を指導する教員への助言もいただくことにしている。昨年度は、課題研究の校内発表のうち、特にポスターセッションについて、充実を図った。今年度は、それをもとに、オーラル発表、ポスターセッション共にさらに充実させていきたい。

２「二兎を追うたくましさ」を育成するための教育システムの再構築

３「自主自律の精神」を深化させるための教育システムの再構築

（１）「二兎を追うたくましさ」の育成とリーダーの育成

ア リーダー育成プログラムⅠの充実

各部や同好会の代表生徒による会議の他、年２回、外部講師を招いての講演会を行っている。

イ リーダー育成プログラムⅢの充実

部活動に参加する部員を対象に、毎月理学療法士十数名を招いて、指導・支援をしていただいている。

（２）「二兎を追うたくましさ」の育成と「自主自律の精神」の育成

ア 地域とつながるこころの育成

これまでも、地域と連携した活動やボランティア活動については、地域清掃、地域の祭りの手伝い、地域の小中学生を対象にしたスポーツ教室等、多岐にわたる活動に取り組んできている。今年度も生徒たちにさまざまな活動を推奨していきたい。

４ 教員の授業力向上のためのシステムの構築

（１）授業力向上のためのシステムの充実

ア 教科会議の充実及び研究授業の実施

新学習指導要領について、勉強会等を行いながら、研究を続けている。

イ 教員相互の授業評価の充実

バディシステム（互見授業）をより活性化するため、昨年度は推進週間を定め実施し

た。今年度もさらに充実させていきたい。

エ 「働き方改革」の推進

長時間労働等を解消する方策については、さまざまな方面から検討を続けていく。

今春の進路状況について、進路指導主事より資料をもとに説明

②教科書の選定について

高校の教科書選定のしくみを説明。委員の皆様には、第２回学校運営協議会で、またＰＴＡ役員の皆様には役員会で選定の報告と意見聴取を行いたい。

③質疑応答

＜進路指導について＞

委　員：資料によると、昨年度と比較して進路状況の変化（国公立大学への進学者数大幅増）が見られるが、何か指導方法等で特に工夫したこと等はあるのか。

事務局：特に例年と異なる指導をしたわけではない。現役生も、浪人生もよく頑張った結果である。また、単に「大学名」のみで志望大学を決めるのではなく、どのようなことを学びたいのかという「学ぶ内容」で志望大学を決めるという意識を持った生徒が多かった。

委　員：その傾向は、本人の意識としてなのか、それとも保護者の希望なのか。

事務局：もちろん保護者の意向もあるだろうが、本人の意識として、この大学でこれを学びたいということを重視して志望大学を決めていると思われる。

委　員：実際に、この５年間で「この大学のこの学部でやりたいことがあるから入学した」という学生の割合が高くなった。これは、中学校、高校でのキャリア教育の成果ではないかと思う。進学実績の評価方法も変化していくのではないか。

委　員：生徒たちは、いつ頃志望大学を決めるのか。

事務局：個々に違いはあるが、最終的にはセンター試験の結果によって出願先を決定している。「高い志」をモットーとして、「君たちの志は何か」と問いかける指導、自分たちの覚悟を問う指導をしている。そのため、浪人、つまり再チャレンジを選択する生徒も多い。

委　員：「卒業生講座」や「東京スタディツアー」等は、どのような思いを持って指導しているのか。

事務局：生徒たちの進路選択に資するものとして、また時代の最先端の学問等に触れさせるという目的もある。

委　員：このような取組みは、今目の前にいる生徒たちの 20 年後、30 年後が見える取組みということも言えるのではないか。また、卒業生講座の講師を務めた人たちからは、講師同士で話し合う時間も持ちたい、という要望も聞いている。

＜カリキュラムマネジメントについて＞

委　員：新学習指導要領に向けて、カリキュラムマネジメントの取組みを広めるために具体的にはどのようなことをしているのか。

事務局：バディシステム、すなわち互見授業をさらに発展させ、そこから、教科の枠を超えた連携等の可能性を含め組み立てていく方針である。

委　員：TOEFL も教科の枠を超えた知識が問われるものであるが、これまでの TOEFL の取組みの中ではどうであったのか。

事務局：TOEFL の教材で、教科の枠を超えた連携を深めるというところまでは至らなかった。

委　員：茨高生は TOEFL iBT でどのくらい得点できるのか。

事務局：昨年度まで、TOEFL iBT complete practice test を受験させていた。受験した生徒のスコアの平均は 38～40 くらいで､受験に向けての勉強をしっかりしていくと 60 くらいになる。留学をめざしている生徒であれば 80 くらいである。ただし、機器の環境によって、スピーキングテストの解答がうまく記録されず、その部分の得点が無効になることも少なからずあった。

＜その他＞

委　員：入学してから、茨木高校での学習や部活、数多くの行事等を経験していく中で、しんどくなる生徒はいないのか。

事務局：中学校から高校への環境の変化や、学習面ではおそらく初めて「内容が難しい、理解できない」という経験をし、しんどさを感じる生徒もいる。徐々にバランスを取りながら自分なりの学校生活のスタイルを見つけていくのだが、そのサポートとして教育相談の体制を整えている。担任をはじめ、どの先生にでも相談することが可能であるし、月 1 回スクールカウンセラーの来校日に相談することもできる。

委　員：学校経営計画の中期的目標の中で、大学名をあげてその合格者数合計数を目標としているが、合格者数という数値を外すことができないのか。生徒たちの中にはその大学を志望していない者、あるいは大学進学以外の進路を考えている者もいる。大学名をあげての数値目標があることで、生徒たちへの指導が一律になったり、それ以外の進路をめざす生徒が疎外感を感じたりすることがあるのではないか。

委　員：目標達成の指標として、数値が求められている部分もあると思われる。

事務局：数値目標があるからといって、本人の希望しない進路を強要するようなことはない。生徒一人ひとりが希望する進路へ向けて努力することをサポートしていくことが基本である。また、授業を中心とした学校の学習指導でいわゆる難関大学にも合格できる学力を保証することが茨木高校の使命であるとも考えている。

委　員：社会へ出ると、どの大学出身かということより、どれだけ世の中の役に立つことができるのかが重要になってくる。

委　員：茨木高校の教育は、タフさを育てる取組みをしていると言える。それは、一生続く学びである。茨木高校には、人との出会いつながりを大切にし、そのつながりが生かせる学びがある。

委　員：昨年度の「学校教育自己診断　生徒版」の 2 年生の回答を他学年と比較すると、「学校に行くのが楽しい」「学校生活についての先生の指導には納得できる」等の質問内容対して「とてもそう思う」と答えた割合が低いのはなぜか。

事務局：その学年特有の理由が影響する場合もあるが、2 年生という学年そのものの特徴として、入学して 1 年目の学年、卒業を間近に控えた学年よりも、日々の学校生活での悩みや迷い、あるいは自分なりの意見のようなものが強く出てくる傾向にあるのではないかと思われる。

委　員：高大連携事業の「グローバルサイエンスキャンパス」について、応募者と受講者に差があるのはなぜか。

事務局：「グローバルサイエンスキャンパス」については、応募者全員が受講できるわけではなく、それぞれの大学で選考があり、合格者のみが受講できる、ということになっている。

委　員：英語でのディベートについて、事後アンケートの結果をみると、「英語学習に対するモチベーションが上がった」「英語の力がついたと思う」について、肯定的回答がそれぞれ 72%、78%と、少々低い値なのではないか。

事務局：肯定的回答がもう少し伸びてほしいのだが、アカデミックディベートに取り組む難しさが出ていると思われる。一方で、「テーマについての考えを深めることができた」「１つの問題をいろいろな面から考えられるようになった」について、肯定的回答がそれぞれ 100%、89%であることから、ディベートに取り組む目的は達成されているのではないかと考える。

委　員：「働き方改革」について、何か対策はあるのか。

事務局：現在、時間割に組み込まれている会議は 65 分で行っているが、それを 50 分で終えることで、15 分を他の業務に使うことができるのではないか、また、ICT の活用により、会議資料のペーパーレス化を進めていくことも考えている。

＜国際ソロプチミストＳクラブ認証式について＞

委　員：生徒たちの活動報告での「寒天づくり」の取組みには驚かされた。

委　員：これまでの20年間の「茨高まちづくりプロジェクト」の取組みが認められてよかった。

委　員：認証式の中で、国際ソロプチミストについての紹介があってもよかったのではないかと思った。

委　員：活動を次年度以降にどのように引き継いで行くのかが大切である。

＜教科書選定について＞

委　員：校内での選定時、外部から学識経験者と保護者を招いて選定委員会を設置し、教科主任が各教科の選定理由を説明して承認するという県もある。

＜教育目標の説明＞

事務局：昨年度、小塚泰彦氏（株式会社morph transcreation・高49回）のご協力を得て、茨高のブランディングを行い、Philosophy（過去から継承するもの）として、「勤倹力行　質実剛健　以文会友」を据え、Mission（現在獲得するもの）として「高い志　枠を超える知性　自主自律の精神」を、そしてVision（未来の動力となるもの）として「円くなるな、無限であれ。」の理念ツリーを作成した。

④次回運営協議会の日程

第2回学校運営協議会　令和元年10月5日（土）　午後2時～4時